

花のお江戸を歩く会

＝大奥：徳川女性たちと江戸の町＝

「江戸城大奥跡～春日稻荷神社～柳森神社」

迷子時の連絡先～09085831528

＜散歩道のご案内＞

手垢のついた観光ガイドから離れて、自分なりに一定のテーマを設定し、江戸時代の個別の事件や人物にスポットをあて、それらを繋ぎ合わせていくと、普段歩きなれた町の風景が一変します。今回は江戸時代の中で常に女性たちの権力闘争の場になった「大奥」をテーマに、江戸のそこかしこに点在する徳川家女性たちが辿った歴史スポットを散策し、その面影を追ってみたいと思います。「花のお江戸を歩く会」ならではのユニークかつ実のある企画です。ご期待ください。

＜散歩道の順路＞最終的な下見で一部変更の可能性あり

大手町駅→大手門→大奥跡（石室・井戸など）→平川門（不浄門）→一ツ橋徳川家屋敷跡（篤姫縁）→メトロ東西線「竹橋駅」＝160円＝メトロ南北線「本駒込駅1番出口」→白山神社（桂昌院縁）→小石川植物園（大奥化粧水生産地）→宗慶寺（茶阿局縁）→伝通院（徳川家の巨利）→礪川公園→春日稻荷神社（春日局縁）→昌清寺（徳川忠長縁）→赤門→麟祥院（春日局縁）→講安寺（お美代の方縁）→湯島天満宮（大奥女中縁）→霊雲寺（皇女和宮縁）→妻恋神社（お夏の方縁）→神田神社→湯島聖堂（桂昌院縁）→柳森神社（大奥出世祈願）→秋葉原駅(解散)

＜個別ガイド＞

① 旧江戸城

江戸時代の旧地は、平安時代の末期から鎌倉時代にかけて江戸氏（世田谷区喜多見に菩提寺がある）が居館を構えていた。

江戸氏退転後、長禄元年（1457年）太田道灌がここに居城を構え、文明18年（1486年）まで30年間その城主であった。その後、上杉氏（30年間）北条氏（67年）がここを領有したが、天正18年（1590年）徳川家康が入城して慶長8年（1603年）ここに幕府を開き、明治元年（1868年）皇居となるまで徳川氏が居城であった。

江戸城は、徳川氏入国後、家康、秀忠、家光の三代にわたって漸次拡大強化され、寛永13年（1636年）外郭の城門まで完成して、我が国最大の城郭となった。

本丸は、幕府及び将軍の居所で、寛永当時の本丸の建物は、表、中奥、大奥から成る総面積は3万3千平方メートルの宏壮豪華なものであった。

周辺には天守閣のほか、櫓11棟、多聞15棟諸門20数棟があった。本丸は度重なる火災等により、現在するものは、富士見櫓及び富士見多聞のみである。→大手門→富士見

櫓→松の廊下→午後の砲台

② 大奥跡

初代将軍・徳川家康の頃から江戸城の中に、『大奥』と呼ばれるものはありました。当時は『表』である男性が政治を行う場所と、『奥』である女性が家政を行う場所の境界がありませんでした。この境界が敷かれたのは、1,618年に第2代将軍・徳川秀忠が『大奥法度』を制定したことによります。制定以後、『表』は幕府政庁、『中奥（奥）』が、将軍が政務を執る場所、『大奥』が将軍の私邸とされました。この後、第3代将軍・徳川家光の乳母、春日局によって組織的な整備がされ、私たちが現在知る形の大奥になっていきました。1,868年4月、江戸城明け渡しが決まると同時に、大奥も終焉を迎えます。第14代将軍・徳川家茂正室、静観院宮（和宮親子・かずのみやちかこ）と生母・実成院は清水邸へ、翌日、第13代将軍・徳川家定正室、天しょう院（篤姫）と生母・本寿院が一橋邸に移りました。

★大奥の構造★

大奥が置かれていたのは、江戸城本丸、二の丸、西丸の3つの郭です。将軍夫妻は本丸、二の丸は将軍生母や、かつて将軍に仕えていた側室、西丸は世嗣夫妻、大御所夫妻の私邸になっていました。本丸御殿は表、中奥、大奥に分けられていて、表と中奥は続き御殿でしたが、中奥と大奥の間には、頑丈な銅塀で仕切られていて、それをつなぐ廊下が、有名な『御鈴廊下』です。将軍が大奥に出入りするときに鈴が鳴らされ、それを合図に御錠口の鍵を開けていたことから、この名前がついています。大奥は大きく3つに分けられています。

◆広敷向

大奥の玄関が広敷向になります。ここには男性の広敷役人がいたために、御殿との間の錠口、長局の間の七つ口で仕切られていました。七つ口は女中たちの部屋方や商人が使っていましたが、七つ時（午後4時）になると閉められたので、この名前がついています。

◆御殿向

将軍の寝室、御小座敷、御台所（将軍の正室）の居所、千鳥之間、呉服之間など、大奥女中の詰め所などがありました。御台所の居所は、その時代によって『松御殿』『新御殿』など、呼び方が変わっていました。『御仏間』などの歴代将軍の位牌のある間や、『御対面所』も、この御殿にありました。

◆長局向

2階建てになっている奥女中達の居所です。一之側から四之側までの4棟と、東長局、御半下部屋があり、一之側が大奥最高位である上臈御年寄や、御年寄が、二之側と三之側はその他のお目見え以上の女中、四之側はお目見え以下の女中に配分されるなどし、格式に応じたものでした。→石室→井戸→白鳥濠→天守台→梅林坂

◆平川門

この門は平河門とも書く。また、大奥の女中が出入りしていたので「局門」とも云われていた。この辺りは、昔上平川、下平川などの村があり、江戸港町として交通、交易に重

要な位置を占めていた。平川門は古くは平川口といって冠木門であった。この門も外柵形の構えであるが、他の門とは異なって帯曲輪が外の竹橋門に向けて長く延びており、また平川濠と天神濠に挟まれた通路はコノ字に折れ曲がり、複雑な構造になっている。

石垣は穴太積みで、築城の原則にのっとりって巧妙な造りは、昔の面影をよく残している高麗門の前にかかる平川橋の欄干の疑宝珠は、昔の二重橋にあったのもを移したといわれ、慶長（築城時）と寛文の銘がある。復元とはいえ堂々とした渡櫓門もまた当時の雰囲気をよく伝えている。門の石垣は亀甲状の石切で、木柱の太さは60センチほどある。

平川門の脇に小さな門がある。帯曲輪門で、城内で罪人や死人が出るとこの門から出されたので不浄門といわれている。生きたままこの門を出たのは浅野内匠頭と絵島だけといわれている。

平川門は、奥女中の通用門であったことからお局門（つぼねもん）とも呼ばれている。春日局は江戸城大奥の権力者で、息子の屋敷を訪ね、つい長話で夜になり、暮れ六つ（日の入）の閉門に遅れた。春日局といえども、規則は規則である。寒い夜を門前で明かさざるをえなかったという。ちなみに、開門は明け六つ（日の出）である。目白通り

③ 一ツ橋徳川家屋敷跡(篤姫縁)

徳川家御三卿のひとつ、一橋家の屋敷があった場所です。一橋家は8代将軍吉宗の四男、徳川宗尹（むねただ）に始まる家系です。13代将軍家定の正室篤姫が、江戸城無血開場のあと身を寄せた場所としても有名です。篤姫はその後千駄ヶ谷の徳川家達邸で余生を過ごした。一橋徳川家は、徳川八代将軍吉宗、十一代将軍家斉、15代将軍慶喜は、一橋家の出身です。かつて一橋家のお屋敷はとても広く、このあたりから気象庁や大手町合同庁舎のあるあたりまで広がっていたそうです。→~~メトロ東西線~~「竹橋駅」==160円==~~メトロ南北線~~「本駒込駅1番出口」→ランチタイム→薬師坂

④ 白山神社(桂昌院縁)

創開は古く、天暦年間（947～957）に加賀一宮白山神社を現在の本郷一丁目の地に勧請したと伝えられる。後に元和年間（1615～1624）に2代将軍秀忠の命で、巢鴨原（現在の小石川植物園内）に移ったが、その後五代将軍職につく前の館林侯綱吉の屋敷を小石川植物園内に造営のため、明暦元年（1655）現在地に再度移った。この縁で綱吉と生母桂昌院の厚い帰依を受けた。→逸見坂→御殿坂

⑤ 小石川植物園(大奥化粧水生産地)・・・入園しない

小石川薬草園でヘチマから作られた化粧水が江戸城の大奥に献上されたといわれ、江戸小石川御薬園では、一夏に一石一斗三升の糸瓜水（しかすい）おさめたと記録されています。→吹上坂

⑥ 宗慶寺(茶阿局縁)

浄土宗 吉水山 宗慶寺。応永22年（1415）浄土宗中興の祖、了誉聖問（りょうよしよげい）がこの地で庵を開いた。その後、徳川家康の生母お大の方が現在の伝通院に葬られ、聖問の開いた庵を移し「伝通院」とした。元和7年（1621）松平忠輝の母（家康の

側室＝茶阿局)の墓所となり、法名にちなみ吉水山朝覚院宗慶寺と称するようになった。小石川七福神の寿老人を祀る。

★**茶阿局**＝遠江国金谷の生まれで、百姓の出身であるという。鍛冶屋の八歳に嫁いで一女をもうけたが夫が口論の末殺されたことから、鷹狩に来た家康に犯人を直訴したという逸話がある。その後、家康の側室となり、辰千代(忠輝)・松千代の双子を産んだ。聡明な女性で、晩年の家康に仕え、家康が没するまでの間、終始看護を担い死に水をとったといわれる。家康死後に落飾し「朝覚院」と号し、その後、駿府城から江戸に移って死去。

⑦ 伝通院(徳川家の巨刹)

正式名称は無量山伝通院寿経寺で、1415年に創建。徳川家康の生母(於大の方)の菩提寺で、法名「伝通院殿」にちなんで「伝通院」と呼ばれる。於大の方をはじめ、千姫など徳川家ゆかりの女性の墓を有する。→**こんにゃく閻魔(源覚寺)→千川通→磯川公園→富坂→春日通→白山通**

⑧ 春日稻荷神社(春日局縁)

徳川3代将軍家光の乳母であり、大奥の制度を確立した人物としても知られます。幕府の使者として天皇に拝謁するなど政治家の素養もあり、初期の徳川幕府を安定させた、立役者の一人と言える人物です。寛永七年(1630年)、春日稻荷神社周辺の土地は、彼女の屋敷地と共に、御付の下男30人の給地として幕府より与えられた土地で、春日町、春日殿町の起こりとなります。→**金毘羅宮→忠弥坂→宝生能楽堂→桜蔭高校**

⑨ 昌清寺(徳川忠長縁)

二代目将軍秀忠とお江与は病弱で吃音症の兄竹千代(家光)よりも、利発な二歳違いの弟国千代(忠長)をととも可愛いがっていたといえます。両親からの溺愛を一身に受ける国千代。家臣の間で、やがて将軍を継ぐのは国千代であろうとささやかれます。しかし家光の乳母のお福(春日局)が家康に直談判し、幕府安泰のためにも長兄の家光を将軍にすべしとの訴えにより、3代将軍は家光になりました。

国千代は、元服して忠長と改め、19歳で駿府城主となり、駿河大納言と呼ばれるまでになります。寛永三年には、母であるお江与が死去し、忠長は後ろだてを失います。その後の忠長の行動には、いろいろな臆測が囁かれているようですが、家光との間に確執があったことは、確かだったようで、秀忠が亡くなると忠長は、領地を没収され高崎城に幽閉されることになり、城内で自害を命ぜられます。年29歳でした。

忠長自害の知らせを受けた正室於昌の方(織田信良の娘)は剃髪して松孝院と改め北の丸城へと身を寄せます。そして、忠長の乳母於清は、父が忠長の家老であったことから父は配流の処分となり実家は断絶し、忠長の悲劇の乳母となるのでした。於清もまた、於昌の方と同様に剃髪して於昌の方から一字をもらい昌清尼と改めます。正室であった松孝院は、忠長の菩薩を弔うために乳母の於清に、自分に代わって昌清寺を開かせるのでした

因果なのか偶然なのか、家光の乳母、お福(春日局)と忠長の乳母、於清のゆかりの地が同じく本郷一丁目にあるとは・・・世の無常を感じますね。→**富士見通→壱岐坂→本郷通→**

春日通→壺屋総本店(お土産)

⑩ 麟祥院(春日局縁)

臨濟宗 妙心寺派 天沢山 麟祥院。開基「春日局」は徳川三代将軍家光の乳母として知られている。功なり名をとげた春日局は、幕府の恩恵に報いるために、本郷湯島に寺院を建立しようと思いついた。これを知った将軍家光は、願いをかなえさせるために本郷湯島の土地を寺地として贈った。願いがかなえられた春日局は、「報恩山天沢寺」と名づけた。寛永七年(1630) 涇川という高僧を新しく住職として迎え、改めて春日局自身の菩提寺とした。寛永11年(1634) 涇川和尚から法号をおくられた。これを喜んだ家光は、法号をもって寺号とするように命じたため、「天沢山麟祥院」と号するようになった。

⑪ 湯島天神宮(大奥女中縁)

創建は古く、雄略天皇2年(458)と伝えられる。太田道灌が再興、徳川家康は江戸入りの際、神領五石を寄進している。菅原道真を祀るこの神社は、学問の神様として別名湯島天神としても広く知られている。境内には銅製の鳥居や、迷子探しの奇縁氷人石がある。また、江戸時代には谷中感王寺(天王寺)、目黒不動と並び三富と呼ばれ、幕府公認の富くじ(富突き)を発行した。泉鏡花作の新派の名作『婦系図』の舞台としても有名で、新派の記念碑や鏡花の筆塚もある。

また、湯島天神下では、若い男性が春を売る商売があり、一般に陰間茶屋と呼ばれました。大奥の女中たちも通ったといわれています。

⑫ 霊雲寺(皇女和宮縁)

元禄四年(1691)、五代将軍徳川綱吉の命により、将軍家の武運長久の祈願寺として創建された。伽藍(がらん)が整い、学寮もあり、土塀をめぐる江戸時代の名刹(めいさつ)であった。幕末、第二次長州征伐に向かった14代家茂が大阪城で病に伏した際、和宮が夫・家茂の病氣平癒の祈禱を霊雲寺に命じた。→三組坂上→清水坂

⑬ 妻恋神社(お夏の方縁)

妻恋神社の創建年代は不詳ですが、日本武尊の東征のおり、三浦半島から房総へ渡るとき、大暴風雨に会い、妃の弟橘姫が身を海に投げて海神を鎮め、尊の一行を救ったことを慕い、妻恋神社として創建したといえます。境内社の妻恋稲荷神社は、関東総司・妻恋稲荷として有名で、王子稲荷と並んで多くの参詣者を集めたといえます。

社前の妻恋坂に3代目家光の側室・お夏の方の実家・藤枝家の屋敷があった。御湯殿の役目の際に懐妊した娘のおかげで藤枝家は京都の町人から士分に取り立てられた

⑭ 神田神社

正式名称は神田神社と称し、1300年近くの歴史をもつ神田明神、江戸の総鎮守でも。神田・日本橋・秋葉原・大手町・丸の内・旧神田市場・築地魚市場など108か町会の総氏神であり、神田祭が行われ全国的にその名が知られる神社である。

江戸時代、神田祭は山王祭、深川祭と並んで江戸三大祭のひとつで、36台以上の華麗な山車が江戸城に入り、将軍をはじめ大奥の女性に至るまでが上覧した。江戸城中に入ったこ

とで、「天下祭」と言われる。→昌平坂→相生坂→昌平橋→万世橋→柳原通

⑮ 柳森神社(大奥出世祈願)

室町期の長禄2年(1458)、太田道灌公が江戸城を築城した際に東北の鬼門鎮護の為に京都伏見稻荷神社を勧請して創建。神田川土堤一帯に柳の木を多数植えて繁茂したことから柳森神社と呼称された。

「おたぬきさん」として愛されている「福寿神」が境内に鎮座している。徳川五代将軍綱吉公の頃に将軍のご生母である桂昌院によって江戸城内に福寿いなりとして創建。桂昌院は京都堀川の八百屋の娘であったが、春日局に見込まれ、三代将軍家光の側室となり五代将軍綱吉公のご生母となった。大奥の女性の多くは「他を抜いて(たぬき)玉の輿にのった桂昌院の幸運」にあやかりたい、こぞって「おたぬきさま」を崇拝したという。のちに向柳原の御旗本であった瓦林邸内に祠が移され、明治二年に柳森神社に合祀された。→

秋葉原駅(解散)